

特別講義

日本赤十字社の過去・現在・未来 そして 赤十字看護について

日 時：令和5年11月30日 13:00～14:30

場 所：日本赤十字広島看護大学 ソフィアホール

講演者：日本赤十字学園理事長 富田 博樹

ご紹介いただきました理事長の富田です。このような機会を頂きました田村学長をはじめ大学の関係者の皆様に感謝申し上げます。本日は日本赤十字社の過去・現在・未来について、そして後半で赤十字看護についてお話をさせていただきます。皆さんが赤十字について受講された講義を調べさせていただきました。必修科目、それから選択科目等、非常に充実した授業を受けてらっしゃることを確認することができました。これほどの内容の講義を受ける機会は、日赤に勤務している他の職員には残念ながら与えられておりません。ですから、おそらく皆さんが赤十字の仲間の中では、赤十字に関しては知的エリートに属すると思っております。今日、私が皆さんの前で赤十字についてお話をしようと思っておりますが、今ここで改めて赤十字の話をするとしても、皆さんの方がおそらくより多くのことを知ってらっしゃるのではないかと思います。

先ほどご紹介いただきましたけれども、約30年、武蔵野赤十字病院で脳神経外科医として勤務をしておりまして。そして、本社に移って約10年勤務をしております。合わせて約40年、私の人生のほぼ全てを日赤で過ごしております。脳神経外科医として赤十字病院に勤務した経験から、また、日赤本社において幹部として赤十字全体の運営に携わってきた経験から、特に後半では私の赤十字看護への思いをお話しさせていただきます。これらを今日皆さんに伝えることができれば嬉しい限りです。

皆さんがこの大学を受験しようと思った時に「赤十字」について、様々なイメージを頭の中に浮かべたのではないのでしょうか。例えば、災害救護、赤十字病院、献血、国際支援、ナイチンゲール、博愛、奉仕、公平、平等、人道、信頼、そして看護師です。

私は本社に来てから、財界の人たちとよく話をする機会がありますが、日本を代表するような財界の人たちは、赤十字と聞くと真っ先に看護師と見えてくると感じます。このくらいに赤十字は看護師というものを代表する言葉にもなっています。

日赤は、国民から絶対的な信頼をいただいています。その一例をお話しします。安曇野赤十字病院の災害救護報告会について院長から教えていただきました。2014年に御嶽山の噴火の災害があり、58名の方が亡くなりました。この時に、家族の方が不安に思いながら待機所で待っていました。その様子を警察が見て、そこにいた安曇野赤十字病院救護班に対して要請があり、待機所の家族の心のケアをしたそうです。そうしたところ、家族の方から感謝の言葉をいただきました。このような言葉です。

「赤十字の職員が来てくれることで、国から守られていると感じ、とてもうれしかった。私たちは、見捨てられていないという実感があり、力になりました」

これが、国民の方々が私たちの赤い救護服を見た時、自分達は守られていると感じるのです。

東日本大震災の被災者の心のケアを研究している研究者と話したことがあります。その研究者が被災者の聞き取り調査で見つけたことは「被災者の心のケアは早ければ早いほど効果が高いから、なるべく早く心のケアに取り組むべきだ。そして日赤の赤い救護服を見た時に被災者はそれだけで安心感につながっており、心のケアとなっていた」ということでした。(図1)

これほど私たちは国民から信頼されており、期待されています。義援金とは、災害の際に国民が被災者に直接お金を渡したい場合に寄付として預けるお金です。東日本大震災の時には国民が総額で約3,800

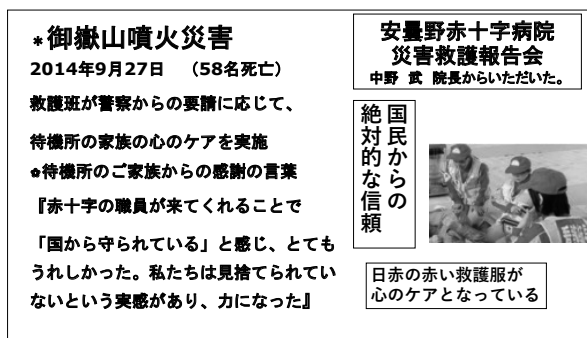


図 1

億円という巨額を義援金として寄付をしました。そのうちの90%が日赤に寄付されました。

この義援金の受付窓口は日赤ではありません。けれども、国民の9割の方たちは日赤にお金を持ってきてくれました。これほど国民から絶対的に信頼されています。

私たちはあくまでも民間団体です。民間団体にも関わらず、これだけ国民から絶対的な信頼を得ている組織であることを、是非皆さんの心に留めて下さい。

日本赤十字社は名誉総裁として皇后陛下を、名誉副総裁として殿下、妃殿下をお迎えし、全国赤十字大会やナイチンゲール記章授与式等にご臨席を賜っています。(図2)

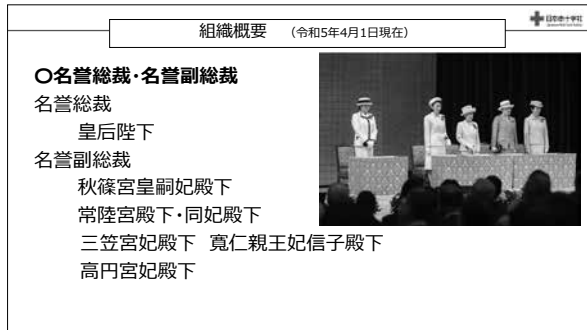


図 2

日赤への絶対的な信頼を国も法律で守ってくれています。赤十字のマークをみだりに使うと法律で罰せられます。懲役6か月以下の刑です。ですから、皆さんの背中にはこの赤十字マークがペタッと貼りついていると自覚してください。そして、私たちは人間の命と健康、尊厳を守りますという人道の実践をするという、この使命を共有しているからこそ、国民から信頼されているのです。

皆さんはすでによくご存じだと思いますが、赤十字とは一体どういうものか、過去のことを簡単に触れます。アンリー・デュナンと佐野常民についてはご存じの通りです。それぞれが戦争を機会に赤十字

社、それから、博愛社を立ち上げました。

アンリー・デュナンは実業家で、博愛の心を持った情熱の人でした。佐野常民は、佐賀藩で医者になるために西洋医学を学んでいました。医者になるはずだったのですが、あまりに優秀だったので、政治家になったのです。

アンリー・デュナンは赤十字創設後、事業が破産して表舞台から消え去り、不遇な半生でしたが、人生の後半で再度大きな評価を得ました。

佐野常民は政治家として大活躍をしますが、人道というものを大切にする赤十字が日本の中に広がってこそ初めて日本は文明化したと言えるのだという信念のもとに、日本赤十字社を全国に広げ大きくすることに一生を捧げました。佐野常民の信念と努力のおかげで今の日赤があります。

ヨーロッパに赤十字が設立されてから20年間は、各国がほぼ毎年のように戦争していた時代でした。ですからヨーロッパの各国赤十字はある意味で戦時救護として大活躍したわけですが、日本はというと、西南戦争で博愛社が創立されましたが(10年後に日本赤十字社に改称)、その後20年間日清戦争まで幸いなことに日本は大きな戦争がない時代でした。ただ、日赤に改称した翌年には磐梯山の噴火による大災害がありました。

当時の皇后陛下は、赤十字というのは平時の災害に対する医療救護も行うべきとの強い信念を持っておられました。佐野常民に指示をし、その費用も工面され、日赤の初めての災害救護活動が行われました。その後も様々な災害がありましたが、その度に皇后陛下からご指示があり、災害救護に行ったことがそもそもの始まりです。そこで日赤では明治25年に、世界の赤十字社で初めて、戦時救護だけではなく、災害救護も業務の規定に加えています。平時の災害救護活動は、現在の赤十字社では世界中当たり前になっていますけれども、実は日赤が世界で1番最初に始めたことです。

皇后陛下(昭憲皇太后)は明治45年に、今のお金で3億5,000万円を平時の赤十字活動への基金として国際赤十字に寄付をされ、昭憲皇太后基金として約100年間運営されています。いままでに166の国に15億円配布されています。

1917年に発足した国際赤十字連盟の活動方針にも日赤の経験と主張が強く反映し、連盟の活動は、平時の災害・保健衛生事業活動が主体となっています。一方、赤十字国際委員会(ICRC)は紛争犠牲者の保護救済を主任務としています。

14年前、この赤十字連盟の会長にアジアから初め

て、日赤の近衛社長が選挙で会長に選ばれました。2期8年間務められました。

世界の赤十字社の中で、日赤の事業規模は最大です。それは日赤が多数の病院を擁していることが最大の要因です。そしてその多くの病院の職員が赤十字の活動を支えているという特徴もっています。

赤十字病院は3県（山形、奈良、宮崎）以外の全都道府県に91病院、その規模は大病院から小病院まで様々ですが、各県に1病院～10病院（北海道）設置されています。（図3）

病床数	施設数	設置地域
900床台	1施設	大阪
800床台	3施設	名古屋第一・名古屋第二・和歌山医療C
700床台	3施設	医療C・成田・大津
600床台	10施設	さいたま・武蔵野・横浜みなと・長岡・福井・長野・伊勢・京都第一・京都第二・松山
500床台	10施設	旭川・北見・前橋・足利・姫路・岡山・松江・広島原爆・高松・福岡
400床台	18施設	新潟・八戸・盛岡・石巻・秋田・水戸・那須・深谷・富山・諏訪・高山・静岡・長浜・高槻・山口・徳島・高知・熊本
300床台	15施設	伊達・仙台・芳賀・小川・大森・栗野・安藤野・岐阜・浜松・神戸・鳥取・庄原・唐津・大分・沖縄
200床台	8施設	福島・古河・金沢・山梨・徳島・三原・長崎原爆
100床台	16施設	東山・浦河・函館・厚町・葛飾病院・相模原・下伊那・沼野・大津志賀・舞鶴・多可・小野田・今津・嘉麻・長崎原爆後援・鹿児島
99床以下	7施設	小清水・粟戸・清水・川西・伊豆・引佐・岡山玉野

2024年3月31日時点許可病床数

図3

病院の活動規模を知る指標として年間入院患者数が使われますが、赤十字病院の中の45%がそれぞれ県の中のベスト5に入っています。さらに赤十字病院の中に高度な病院機能を持った病院が多いのも特徴です。赤十字病院の40～70%が災害拠点病院・救命救急センター・がん診療連携拠点病院・周産期母子医療センターなどの指定を受けています。これは同規模の他の病院グループ（済生会：84病院、厚生連：101病院）と比べても圧倒的に多くの指定を受けており、さらに大学病院相当の診療実績と評価される特定病院群に21病院が属しており、赤十字病院グループが我が国の最大最強の病院グループと言われる所以であります。このグループ力を強めるために、2016年に医療事業推進本部を発足させました。これについては後でお話しします。（図4）

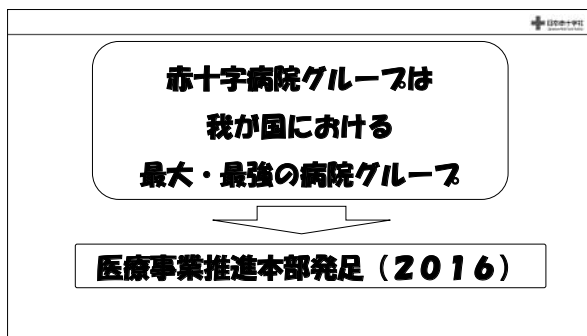


図4

赤十字病院のもう一つの特徴は、赤十字病院が赤十字活動を担うことを国民に約束していることです。病院の職員たちが赤十字精神に基づいた活動を行っています。それは地域医療・公的医療・国内災害救護・国際活動そして看護師養成です。他のどの病院団体もこれほどのことは行ってはいません。赤十字病院は特別な病院です。（図5）

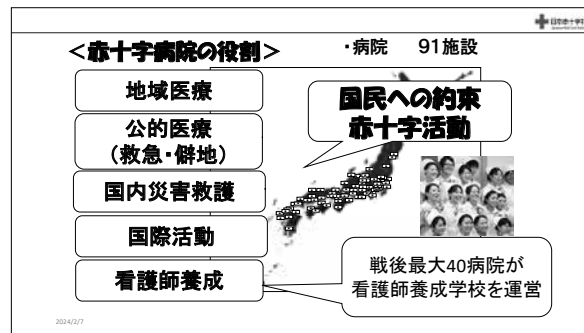


図5

災害救護についてお話しします。常備救護班は約500班各病院が常備しており、約4,500人が訓練されて救護に出られるように準備しています。医師1名（班長）、看護師3名、主事2名、その他で班は編成されていますが、必ず看護師長がメンバーに入っています。私が武蔵野赤十字病院の院長の時に、東日本大震災がおきました。多くの救護班を派遣しましたが、その中にはまだ十分な訓練を受けていない医師を班長とした救護班も含まれていました。その医師が派遣前にやってきて「院長、班長として行きませうけど自信がありません」と言ってきたので、答えました。「師長がいるから大丈夫だ。師長が班長だと思って活動すれば大丈夫だ」と言って送り出しました。そして、帰ってきて私に「院長の言った通りでした」と報告してくれました。これが赤十字病院の特徴なのです。看護師が非常にしっかりとした教育・訓練を受けており、特に師長クラスは充実しているのです。十分に救護班の班長役ができるのです。

次に私たちの持っているロジスティクスです。民間団体において日赤のみが無線専用チャンネルを持っています。

救護車両が約2,000台、そして、小手術ができる仮設診療所を展開できるコンテナに収容された器材と、14名の医療スタッフで構成されたdERU（国内型緊急対応ユニット）が16ユニット全国に準備されています。私は自衛隊の方と話す機会があったのですが、この装備を紹介するとびっくりされました。民間団体でよくこれだけのものを準備していますねと

言われます。最近、テントで病院を展開する Hospital ERU を整備しました。世界ではフィンランド、ノルウェー、ドイツ、カナダ4か国の赤十字社が持っていました。私たちは5か国目の保有社になります。

21世紀は災害の世紀と言われていますが、日本を含めて世界中で災害が頻発しています。日赤は国内災害には救護・支援活動を展開し、海外へは様々な支援活動を行なっています。

東日本大震災での活動を少しご紹介します。この震災では様々な団体が医療救護班を出しました。6か月経った後で、厚労省が医療救護班の派遣実績を纏めてくれました。全日本で1万2,000人の医療救護班が現地に行きましたが、日赤がその中の55%を占めました。やはりなんと言っても日赤は随一の医療救護を行う団体です。

もう1つ皆さんにご紹介したいのは、世界の赤十字社から日赤に対して約1,000億円の救援金が届けられました。米国からは最多230億円、次は台湾からは68億円が届けられました。台湾の人口は米国の1/10ですから、大変に多くの台湾の人々が日本を心配して赤十字にお金を寄付してくれました。さらに多くの発展途上国からも救援金をいただきました。とても貧しい国なのですが、その国民たちも日本のことを心配して、その国の赤十字に、なけなしの金を寄付して持ってきてくれました。赤十字というのは、このように貧しい国も豊かな国も、本当にお互い助け合うという気持ちで繋がっている、ということがわかると思います。

支援をしてくださった世界の赤十字の各社を日赤本社にお招きして、いただいた救援金の使途を説明し、さらに日赤が行った災害救護活動について報告をしました。そうしたところ、出席していた欧米の赤十字社の代表の人たちが、次々に立ち上がってこう言いました。「もし、同じ規模の災害が自分の国に起きた時には、我々の赤十字社ではとても日赤ほどの医療救護活動はできないだろう」と絶賛されました。

私たちが行なっている災害医療救護活動は、実は世界の赤十字から見ると驚くべき程の規模と内容なのです。これを皆さんに伝えたいと思います。これは本社にいて、世界の赤十字の人と話をしないと気がつくことができないことでした。海外赤十字社からの救援金で行った支援で1番喜ばれた取り組みは、生活家電6点セット（TV、洗濯機、冷蔵庫等）を被災された12万世帯に贈ったことでした。仮設住宅の中には何もなかったもので、この家電セットは大変

に喜ばれました。

もう1つ、みなさんにお伝えしたいのは、被災した子どもたちを招いたサマーキャンプです。被災した子どもたちは、避難所や仮設住宅から学校に通っていましたが、でも、親たちから聞くと子どもたちの心が塞がってしまっているとのことでした。そこで、夏休みに北海道のトマムリゾートを借り切って、被災した小学校5年生から中学3年までの希望者を募集し、現地から飛行機を利用して、1年目約3,400人、2年目約2,300人を3泊4日のキャンプに招待しました。その運営を助けるために、多くのボランティアが必要でしたが、JRCの教師の方々、看護大学や他の大学の学生、そして若いサラリーマンの人たちが参加してくれました。1年目約950名、2年目約870名がそれぞれ1週間～2週間活動してくれました。本当に子どもたちが喜んでくれました。お礼の手紙がたくさん届きました。その中の1つの手紙をご紹介します。5年生の男の子のお母さんからの手紙です。

「うちの子どもは津波に流されてやっとの思いで帰って、学校に通い始めましたが、もう何にも喋らなくなって、学校でも話をしない。お家に帰っても、子どもは学校で何があったか話をしてくれない。そんな子どもだったけれども、キャンプに行き帰ってきたら、もう口が止まらないのです。『ねえねえ、お母さん、こんな友達がいたんだよ、こんなことしたんだよ、こんなに楽しいことがあったんだよ』って言って、口が止まらないほどになりました。やっとな心を開いてくれました。本当にありがとうございました」というお礼状でした。そんなお礼状が沢山届きました。2年で合わせて約6,000名の子どもを北海道まで連れてきて約1週間滞在し、約2,000名のボランティアが1～2週間参加してくれる、これほどことができる組織は、おそらく日本では日赤しかないと思います。これだけのことを私たちはしてきたことを皆さんにお伝えさせていただきます。（図6）



図6

熊本地震の話です。2016年4月に熊本で大きな地震がありました。東日本大震災の経験がありましたので、救護班は素早く出動して、最終的に100班以上の救護班が災害救護活動を行いました。一方、熊本県の災害対応の中核である基幹災害拠点病院に指定されている熊本赤十字病院が被災してしまいました。震源の近くだったので、壁が割れたり、天井板が落ちたりしましたが、なんとか病院機能は維持できていました。ただ、周辺の病院が全て機能停止状態だったので、たくさんの救急の患者さんが押し寄せてきました。熊本赤十字病院のほぼ全職員の自宅が被災損傷し、夜には4割弱が自宅に戻れず、その半数が避難所や車中に宿泊、こんな状態で日頃の3倍から5倍の救急患者が押し寄せていました。

私たちはとても心配して、毎日院長と連絡を取っていました。そして、3日経った時に院長から「もう職員たちが潰れそうなので、医師10名を1週間と看護師20名を2週間できるだけ早く支援に送ってもらえないか」との依頼がありました。そこでFAXを全病院に送り、募集をしましたところ、4時間で締め切らざるを得ないほど、応募が殺到しました。赤十字病院の仲間たちが、熊本赤十字病院のことを心配していたのです。2日後に医師16名、看護師25名、コーディネータ（看護部長）1名が熊本赤十字病院に到着しました。その時の院長の歓迎の挨拶です。「暖かい絆を実感しております。おもてなしも何もできないのが心苦しいです。優しい思いやりに甘えさせていただきます」私はこの後に熊本赤十字病院を訪問しました。そして、その時の気持ちを職員の人たちに聞きました。職員の人達が口々に「もう自分たちが潰れそうになったけど、この赤い救護服が来てくれた時に、自分たちは守られていると思った」と言ってくれました。その後45日間総勢305人（医師63名、看護師203名他）の仲間たちが支援を続けました。

赤十字病院というのはこうやって助け合います。これが私たちの姿です。これも皆さんにお伝えさせていただきます。

国際活動についてお話しします。国際社会では、日本赤十字社は国際医療救護支援活動能力の高い医療職、専門職を多数擁していると高い評価を受けています。要員に登録するためには、国際スタンダードの英語力としてTOEIC730点以上が要求されますが、職員の中で国際活動をしようと志して、努力をして資格を取っている人が非常に多いのです。約500名の日赤の職員が登録して、国際活動に活躍、準備

しています。

日赤は世界の赤十字社で2番目に多くの看護師を海外に派遣しています。COVID-19の前までは大体40人前後が毎年派遣され、その中からナイチンゲール記章授章者も続々と輩出されています。過去14年間で約900人が海外へ派遣されています。

2023年11月17日に大阪赤十字病院の看護部集中治療室の看護係長の川瀬さんが「日本赤十字社職員によるガザ報告会見」として記者会見を行いました。大きく新聞、テレビで報道されましたので、皆さんもご覧になったと思います。パレスチナ赤新月社へは、長年日赤が色々な支援をしていましたが、パレスチナ赤新月社から依頼があり、2019年から医療技術についても支援を始めていました。ガザにある彼らが運営している病院の医師、看護師へ技術支援です。彼らは天井がない監獄に閉じ込められているので、外の情報が入ってこないため、医師や看護師の技術の進歩が止まっているという焦りがありました。そこで日赤がその支援に入っていました。COVID-19で一時中断しましたが、7月から再びパレスチナの病院に入って技術指導支援を行なって、順調にその成果も上がっていました。しかし、2023年10月7日に突然大きな戦争が始まったのです。ガザは激変しました。

彼女は病院に戻ろうとしましたが、病院の仲間たちが、危険だから来ないでほしい、ICRCの指示に従って活動してほしいということで、彼女はガザの南の方で活動をしていました。2週間後に、なんとかガザから脱出することができました。彼女は記者会見で「この言葉をその病院の仲間から預かってきたので、この言葉をぜひ日本の国民、そして世界中の人に届けたいと思い、この記者会見に臨みました。その言葉は『自分たちがどんな悪いことをしたの。命の重さはみんな同じはずなのに、この世界はフェアにできていない。世界中が自分たちを攻撃している。自分たちの人権なんてない。私たちは本当に惨めで不幸だ』です。この仲間からの言葉を日本の人たち、そして世界の人たちに伝えたい」と言って、涙の中、記者会見で話しておられました。田村学長にお話を伺いましたけれども、田村学長も川瀬看護師と一緒にバングラデシュでして活動した経験を持ち、パキスタンで田村学長も同じ思いをしたそうです。この話に涙を流して聞いたとおっしゃっていました。

その後、川瀬看護師は大阪赤十字病院に戻って、報告会をしました。その時に職員たち500人以上がその報告会に参加したと伺っております。日赤の国

際活動の特徴というのは、職場の支援が国際活動を支える。まさに今、川瀬さんの報告に500人以上の職員が参加したということからもわかります。看護師が国際活動で海外に出ると、3か月から半年、長いと1年、職場を離れます。しかし、病院の職員は、国際活動をしている人たちを誇りに思い、支えてくれるのです。赤十字病院ではまさに川瀬さんのように、3か月、半年海外で活動して帰ってきたら、留守を守っていた人たちが「ご苦労さん、よく行ってきたね。どんなことしてきたの。報告してちょうだい」と言って、みんなで話を聞く。日赤はこのような団体なのです。このような団体は、日本では日赤だけで、他はあまりないと思います。これを皆さんに知っていただきたいと思っていました。

次に COVID-19感染症への日赤の対応についてお話をしましょう。2020年1月に中国で、正体不明のウイルスの流行が始まったというニュースが流れ始めた時に、船内で COVID-19感染症が蔓延しているダイヤモンドプリンセス号が横浜に入港しました。政府からすぐに日赤に、この船内に入って、船内の乗客と乗員の医療ケアをしてほしいとの要請が届きました。この時、私は副社長をしていましたが、大塚社長と共に、今回の COVID-19感染症は災害であると判断し、対応するのは日赤の使命だと考え、赤十字病院の院長たちも同じ考えでした。しかし当時、まだ未知のウイルスで、どのような形で感染防護していいかわかりませんでした。そこで感染症の専門家で WHO から信頼が厚く、アフリカでのエボラ出血熱の治療に何度も参加した実績を持つ和歌山赤十字病院感染症科部長の古宮先生に、すぐにクルーズ船内を調査してもらい、感染防護のマニュアルを作成してもらい、そのマニュアルに従って、救護班による船内医療救護活動を行うことにしました。この船の乗員乗客は3分の2が外国人でした。ですから、英語が話せないと薬の説明も問診もできません。赤十字病院にはご存じの通り、英語を得意とする国際活動経験者も多くいますので、医師、看護師、薬剤師、ロジたちが活躍してくれました。救護班の班長として2回船内医療救護活動を行った院長がいます。福島赤十字病院の渡部院長です。今は医療事業推進本部の本部長をされています。最終的には142名（看護師44名）がクルーズ船内の医療救護活動を行いました。他の組織では感染者が出ましたが、日赤は感染者0名でした。これは大きな自信につながりました。

全国の91赤十字病院のうち90病院とほぼ全ての病

院が COVID-19患者の入院を受け入れ、2023年8月段階で累計6万人が入院されています。我が国の病院グループの中で、最も多くの COVID-19患者を入院治療したようです。

これから赤十字看護について少しお話をしたいと思います。まずは私の個人的な体験です。私は暴れん坊でよく骨折しました。10歳の時、相撲で下腿を骨折し、1か月入院しました。その時代は下肢に重りをぶら下げて牽引して、2週間ぐらい骨折部がまっすぐになるのを待ち、そこでギブスを巻く治療をしていました。その間ベッド上で身動きができず、排尿排便清拭全てを看護師に委ねざるを得ない状況でした。子ども6人の大部屋でしたので、排泄の時はとても恥ずかしい思いをしていました。排泄介助や清拭時の看護師の心遣いの違いで、随分安楽度が違うことも実感しました。毎日、医師の診察があり、骨折部のずれ具合を確認するのですが、これが猛烈に痛いのです。ですから、診察があるといわれると震えあがりました。ある看護師さんは前の晩に「明日の朝、診察があるけど頑張るのよ。そばにいてあげるからね」と言ってくれ、翌日の朝、診察の時に必ずその看護師さんがそばに居てくれました。診察は本当に痛いのです。涙が出そうに痛いのですが、診察が終わったあとは看護師さんが「よく頑張ったね」と言って頭を撫でてくれました。痛いというのは辛いのですが、それに孤独だと悲しくなって涙が出てしまいます。そこに看護師がいてくれて、痛みを我慢した自分を慰めてくれると、やっぱり痛みが楽になるし、涙が出なくなるということを私は実感しました。この時の体験が私の看護の原体験となりました。

医学部を卒業して母校の脳神経外科に入りました。そしてすぐに武蔵野赤十字病院の脳外科に派遣されました。当時東京には、救命救急センターが3病院指定されていました。武蔵野赤十字病院はその内の一つでした。交通事故が多発した時代でしたので、大変に忙しい脳外科でした。当時は手術室看護師に当直制度はなく、夜中の緊急手術はオンコールで呼ばれた看護師と一緒に手術をしていました。徹夜をした翌日もお互い通常勤務でした。私が徹夜でふらふらになりながら翌日の手術に入ると、一緒に徹夜で手術した看護師が、同じ手術に入っていて、徹夜して辛いにも関わらず「夜中に手術した患者さんは助かりましたか」と聞いてくれます。「ありがとうおかげで命が助かったよ」と答えると「よかったわ!」と言って、一緒に喜んでくれました。武蔵野

赤十字病院の職員たちは本当に患者さんの為を思って一生懸命な人たちの多い病院でした。また、脳外科は医師が3人しかおらず、新米の私が一人で病棟管理をすることも屢々でした。病棟に行くと、リーダーの看護師から新米の私が報告を受け、私が判断して指示するということとなります。相手はベテランの方ですから、よくできるのです。私の判断が適切でない時には、必ず反論されました。初めは私もムカッとしていましたが、そのうちに私は、看護師たちは患者さんの身になって治療内容を考え、時に患者さんの代弁をしていることに気づきました。

今では、患者主体の医療という言葉が当たり前のように使いますが、当時から武蔵野赤十字病院の看護師たちは真剣に患者の立場に立って考えていました。

これに私は大きな印象を受けました。1年後に大学に戻り、その後約10年大学病院、国立病院、そしてアメリカの大学病院の脳外科にも勤務しましたが、自分が目指す患者さんを大切に思う医療を行える病院は武蔵野赤十字病院であると確信して就職し、その後30年勤めました。武蔵野赤十字病院での医療は期待通りの、患者に誠実な思いやりを持つ看護に支えられた、本当に医師として働きがいのある病院でした。

11年前に本社の要請で事業局長として本社に移り、それまでバラバラだった91の赤十字病院を1つのグループにまとめる仕事をしました。

そのために、全国の赤十字病院を訪問し、院長達と膝を交えて話をしました。そして、院長たちと話していて気が付いたことがありました。院長達がみんな異口同音に「この病院の患者さんたちからの高い評価は看護師のおかげだ」と言うのです。その内容を聞くと、私が武蔵野赤十字病院の看護師の特徴だと思っていたことだったのです。そこで私はやっと気づきました。私が武蔵野赤十字病院の看護師の素晴らしさを誇りに思っていたのですが、これは全国の赤十字病院の看護師が身に着けている「赤十字看護」そのものだったのです。日赤の看護部の方たちは勿論ご存知ですが、医師たちにはなかなかこの概念を知る機会がありません。私にとりこれを知ったことはとても大きな財産になりました。

日赤の看護師養成についてお話をします。明治時代、医療看護班を編成するにあたり、欧米にならって女性の看護師が必要と考え、その養成のため病院を作りました。その最初の病院が今の医療センターです。ただ当時の日本では、女性の看護師はまだ世

間で知られていなかったため、上流階級の婦人たちの協力を得て、篤志看護婦人会を発足させ、看護技術を講習し、昭憲皇太后から大きな支援をいただき、これを全国に広げ、看護師の知名度をあげることができました。それから日赤の看護師養成が始まり、今年で133年になります。様々な組織が明治時代にヨーロッパ式の看護教育を始めていますが、全国に展開し、今まで続いている日赤の看護師養成事業は日本で最も長い伝統を持った、最も規模の大きいものです。

明治時代に9病院、9学校、大正時代合わせて20学校、戦前までに合わせて34の学校ができて、看護師の養成をしています。明治40年には看護婦長の養成コースを作っています。明治時代に看護婦長養成コースを作っているのは驚きです。日赤が看護師、さらにその幹部の養成にいかに力入れてきたかがわかります。

特筆すべきことは、昭和初期に赤十字の看護学校は受験資格を、当時まだ15%しか進学していなかった高等女学校の卒業生に限定したことです。戦前の赤十字看護教育の学校の卒業生は全て高等女学校卒ですから、社会的に非常に高いレベルの教育を受けた女性ということで評価が高まりました。そこで、赤十字看護師への社会からの尊敬が確立しました。(図7) 一方、戦争で従軍看護師として1,000人を超える看護師が亡くなるという、痛ましい歴史にも遭遇しています。

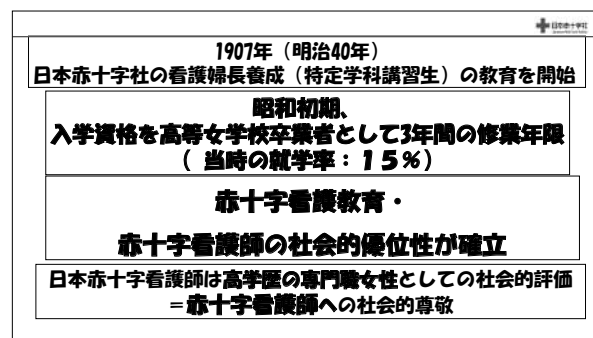


図7

ここで皆さんお伝えしたいのは、戦後できた東京看護教育模範学院という学校です。これは、戦後すぐに米国が日本に理想の看護教育をしようと作ったモデル看護学校です。学校の校舎は現在の日本赤十字看護大学です。そして、実習病院は今の医療センターです。学生は、日本赤十字看護専門学校から2/3、聖路加女子専門学校から1/3の割合で入学しました。そして当時最高の看護教育力を持った新進気鋭の教員たちがアメリカから派遣されました。(図8)



図8

教員たちの看護への基本的な考え方は「高度の看護には優れた知性と豊富な知識と技術，感受性と想像性が必要。看護は科学であり，職業であり，芸術である。医師と看護師は車の両輪である」です。この3つの言葉は今でも赤十字看護教育のベースとなっています。その後米国占領終了まで7年間存在しましたが，約400名卒業し，その3分の2は赤十字の学生です。その人たちが全国に散らばっていきました。そして，看護教育の学校や大規模な病院に入り，そこで指導者になっています。ですから，戦後の日本の看護教育の中核となるのは，この学校の卒業生たちです。まさに赤十字の人たちが，戦後の日本の新しい看護教育の中核をなしていたのです。(図9)

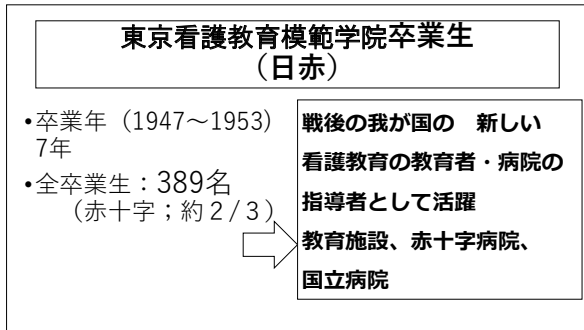


図9

戦後赤十字看護専門学校は最大40校となり，全国に配置されました。

看護大学については，日本赤十字社の代議員会(2008年)において，当時の近衛社長が「共通の教育を受け，共通の使命感を分かち合う質の高い看護師は，日赤のブランドイメージを高め，異なる赤十字事業を1つにつなぐ上で欠くことができない存在である」と述べており，全国6ブロック内に各1大学を設置することを目標にしました。1986年に日赤看護大学が設立され，それから6大学7学部が設置されています。かつて40校あった専門学校は10校にまで減少し1学年400人です。一方，看護大学は1学年755人です。日赤の看護師の養成の主体は大学

に移っています。看護大学の卒業生の7割ぐらいが赤十字病院に就職してくれると，赤十字の理念，赤十字看護というものを維持できると考えています。

赤十字看護についてお話しします。1985年にJALの旅客機が御巣鷹山に墜落し約520名が亡くなるという航空事故史上最大の惨劇が起きました。この事故における日赤救護班，特に看護師の活躍についてです。事故現場は険しい山奥であったため，赤十字病院の医師，看護師は自衛隊のヘリからロープで現場に降り，救助活動を行い，生存者は4名を救助しました。その後は遺体の収容が主な仕事になりました。看護師に求められた仕事は，遺体を綺麗にして棺桶に収めることでした。ただ手足がなかったり，頭がなかったり，片足，片腕だけだったり，そのようなご遺体をきれいに清めて，納棺する作業は熾烈を極めました。最初は群馬県の医師会と群馬県の病院の看護師がその業務に当たったのですが，その凄惨さに手がすくんでしまう看護師も多かった中で，日赤の看護師の整然とした活動が注目を浴びたようです。

そこで，群馬県の医師会から日赤の本社に対して，「赤十字病院から救護班として看護師を派遣してもらいたい」との要請が行われました。関東の赤十字病院を中心として24病院から154班1,033人の救護班が派遣されました。最終的には現場に派遣された看護師の60%が赤十字病院からの看護師でした。現場の全ての看護師は日赤本社の看護課長の総指揮に従っています。その時の赤十字看護師の活動は各界から賞賛されました。当時の現場責任者の群馬医師会の副会長も絶賛しています。

その時に日赤の看護師により整体というものが行われました。体の一部しかないご遺体を現場の手元にある段ボールや包帯を利用して，全体の体を作って納棺する行為です。報告の中の記載の一部を紹介いたします。「看護師は遺体安置所で身内を確認する家族に寄り添う，その希望を受け止め対応した。事故だけに損傷している遺体が多く寝ているような姿で，棺桶の中に入る遺体に整体を行った。遺族は広い棺に夫の腕だけが入っていると覚悟していた。しかし，そこには夫の体があった。夫の体は娘には絶対に見せられないと思っていたら，父との最後の別れをさせることができた。極限の状態の中で救われた」と遺族の方が感謝の言葉を述べておられます。これは日赤の看護師が現場でその場にあるものを利用して，自発的に行いました。体の一部しかないご遺体への思いと家族への思いから，まさに日赤の看

看護師だからこそできたケアだと思います。この整体がこの事故で亡くなられた多くのご遺体になされました。このようなことができるのが赤十字看護です。(図10)

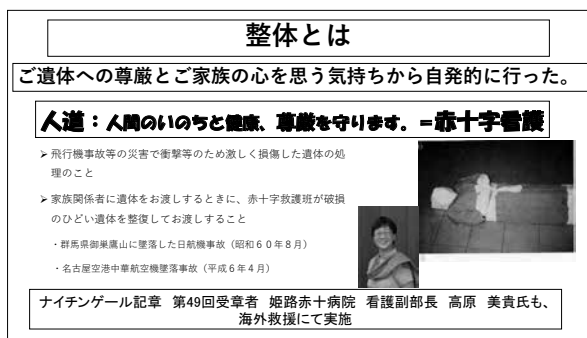


図10

今年のナイチンゲール記章を受章された姫路赤十字病院の高原副看護部長も、海外救援の際、地雷で吹き飛ばされたご遺体を整体して差し上げ、家族の方にとっても感謝されたと報告していました。

日本は世界で1番多く115人がナイチンゲール記章を受章しています。受章者の9割が日赤の出身です。日赤の看護師が世界からいかに高く評価されているのかということがわかります。これもぜひ皆さん頭に入れておいてください。

新人看護師卒後研修についてです。赤十字病院では新人教育についてのサポート体制が非常に手厚く整備されているのが特徴です。

先ほどお話をしたCOVID-19感染症流行時に、赤十字病院では心のケアを極めて丁寧に行ないました。全国の赤十字病院は多くのCOVID-19感染患者を受け入れました。COVID-19流行時に看護師正規職員の離職率は全国平均では増加しましたが、赤十字病院では増えませんでした。特に新人の離職率は全国平均では大きく増加したものの、赤十字病院では増加せず、これは赤十字病院の看護師、特に新人看護師への丁寧なケア・対応の賜物だといえます。

赤十字病院の看護師キャリアアップシステムについてお話いたします。赤十字病院には、キャリアアップするためのラダーが整備されています。まず新人からリーダーになるまでのラダーが用意されています。その後、実践者のラダー、看護部長を目指す人、国際系を目指す人、教員を目指す人とそれぞれの目標に応じたラダーが用意されています。

さらに、赤十字看護大学と赤十字病院が同じ日赤の仲間であることは大きなアドバンテージです。大学と病院との垣根が低く、赤十字病院から大学に

入って修士・博士を取得するなど、このようなことが非常にしやすい組織だということも、皆さん覚えておいてください。(図11)

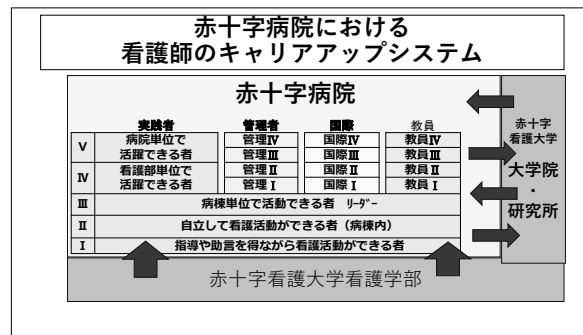


図11

看護師の社会的な地位はますます上がっています。これからいわゆる一流病院で師長になる方は修士、看護部長になる方は博士を持っていることが、いずれ当たり前前の時代になってくると私は思います。そのような時代では、病院と大学の垣根が低い赤十字病院は絶好のポジションにいます。

赤十字病院の看護師の副院長は、16年前に第1号が誕生しました。この第1号の方は武蔵野赤十字病院の高橋看護部長です。院長であった私と一緒に二人三脚で病院の改革をした大切な同僚です。その後次々に看護部長から副院長任命され、累計68名になっています。

看護職の未来についてです。少子高齢化の中で、看護師の役割がさらに大きく、また多様になっています。病院での看護、地域での看護、施設の看護、そして行政の看護と、幅広い領域でその役割が期待されています。(図12)

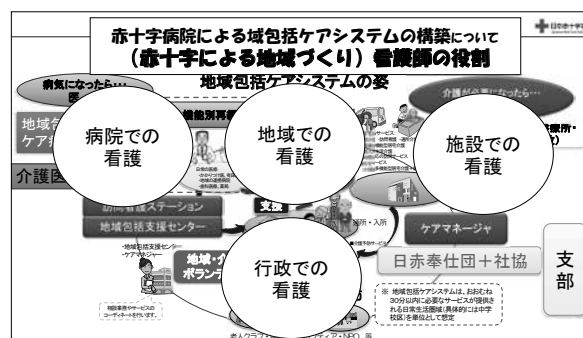


図12

これからは看護の時代だと思っています。そしてその役割を果たす為には、豊かな教育が必要です。赤十字看護大学の理念はまさに赤十字の実践です。皆さんと日赤の職員は人道の実践(人のいのちと健

康, 尊厳を守る) すなわち赤十字運動するという仲間です。(図13)

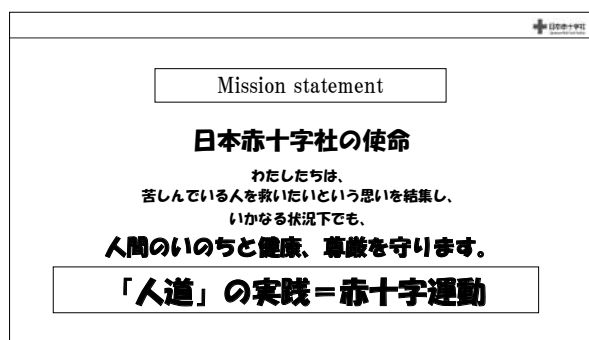


図13

そして、赤十字看護というものに皆さんは触れることができたと思います。人道の実践の理念に基づいて、患者への思いやりの心、患者中心の医療、医師と堂々と議論する患者のための頑張り等、私の赤十字看護に対する思いを言葉にしました。

患者中心の医療というのは、どこの病院でもスローガンとして書くことはできます。しかし、本気になって実践しているのは、私は赤十字病院だと思っています。患者中心の医療、これは赤十字の看護師が最も真剣に実践していると、様々な病院を経

験した多くの赤十字病院の医師達が共通して言っています。

赤十字では看護師がチーム医療のファシリテーターとなり、国内・国際災害救護のリーダーともなっています。

日赤では病院と大学が融合し始めています。そして、世界屈指の看護師海外派遣を誇っています。ですから、赤十字という最高の舞台上で、皆さんが思いっきり活躍する準備ができています。(図14)

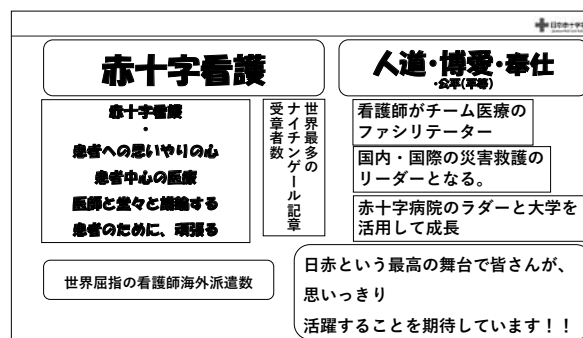


図14

皆さんの将来に大きな期待を寄せています。ご清聴ありがとうございました。